

鮒魚の山と顛頊、昆吾

川 上 義 三

(一) 鮒魚の山と顛頊の家

山海經の記事で顛頊を葬るとするものに、鮒魚之山（海内東經）、務隅之山（海外北經）、附禺之山（大荒北經）がある。

A 漢水出鮒魚之山^①。帝顛頊葬于陽、九嬪葬于陰、四蛇衛之。（海内東經）

B (1) 務隅之山、帝顛頊葬于陽、九嬪葬于陰。一曰、爰有熊羆、文虎、離朱、鳴久、視肉。

(2) 平丘在三桑東。爰有遺玉、青鳥、視肉、楊柳、甘相、甘華、百果所生。有兩山夾上谷、二大丘居中、名曰平丘。（海外北經）

C (1) 東北海之外、大荒之中、河水之間、附禺之山、帝顛頊與九嬪葬焉。爰有鳴久、文具、離兪、鸞鳥、皇鳥、大物、小物。

(2) 有青鳥、琅鳥、玄鳥、黃鳥、虎、豹、熊、羆、黃蛇、

視肉[△]、璿、瑰、瑤、碧、皆出衛于山[○]。丘方圓三百里、丘南有帝俊竹林在焉、大可爲舟。竹南有赤澤水、名曰封淵。有三桑無枝。丘西有沈淵。顛頊所浴。（大荒北經）

右の三つの文を比較すると、AとB(1)は殆ど同文（B(2)は参考のためつづけたのであつて、別條に扱うのが普通である）、C(1)の傍點「、」の部分も殆ど同じである。またB(1)の「一曰」とC(1)の後半とは似ている。C(2)に挙げられた諸物はB(1)の「一曰」、B(2)と共通するものがある。従つてこのA・B・Cの三山の類似性は至つて顯著であるといえる。

ところで、C(2)の諸物が「衛于山」より出るといふのであれば、C(1)の附禺之山とは切り離して別行とすべきである。ただ郝懿行の説によれば、藝文類聚89、初學記28引山海經では「衛丘山」に作り、北堂書鈔137引も「衛丘」に

作るところから、もと、「皆出于山。衛丘方圓三百里」であつたろうという。その「山」は附禺之山のことになり、衛丘とはどのような關係になるのか明らかではない。もし「衛丘」と附禺之山と關係があるなら興味あることである。この點については、封淵、沈淵などと共に後にふれるが、ここで顛項の名が出てすることに注意したい。

C(2)の記事に「三桑」が出てくることから、B(2)平丘の記事を掲げたのであるが、ここでは務禺之山の記事と別條に扱われている。この「三桑」について、海外北經では、「三桑無枝、在歐絲東。其木長百仞、無枝。」といい、次に「范林方三百里、在三桑東、洲環其下。」の記事を並べている。北方二經では、「涇山、三桑生之、其樹皆無枝、其高百仞。」と見える。この「范林」の記事について「務禺之山」の記事があり、次に「平丘在三桑東。」となる。

「平丘」の記事と、C(2)「衛于山」の記事の親近性から、「三桑無枝」の語を介して、務禺の山と平丘、衛于丘のかわりが考えられ、それらのうしろに平于山が想起される。

右の三文に出てくるA鮒魚の山、B務隅の山、C附禺の山は、漢字標記は異なるが、實は「プイ」の音を共通にすると考えられる。p-pi-b-yuとo、さらにpiを連ねた音を

もち、p-o-piを原型音とする。このプイ p-o-piの音は、藏族の自稱(唐代)「蕃」、^⑧「播隅」、白馬人(白馬氏の後)の自稱(現在)「貝」に通ずる。山海經には、前記「符禺の山」などのほか、浮戲、白於、白玉、浮玉、晦隅、篇遇などの山名があり、皆このプイの音を共通にする。

さて、右のA鮒魚、B務隅、C附禺の三山の記事において、その所在地を示すものとしては、Aの「漢水」、Cの「河水の間」・「衛于山」・「封淵」・「沈淵」、それにB(2)の「平丘」がある。

Aで、漢水が鮒魚の山から出ると記されているが、西山經には嶓冢の山からも漢水が出ると記されている。

又西三百二十里、曰嶓冢之山。漢水出焉。而東南流注于沔。(西山經)

この西山經の首、華山を主とする十九山は、概ね渭水に沿つて東西に並び、太華山、少華山の西に符禺の山があり、符禺の水が出ると記されている。その西方に嶓冢山があるとされる。漢水といつても、その源は、甘肅省(西和縣)の山か、陝西省(略陽縣)の山かの二つがあり、従つて嶓冢山も二説ある。

(1)陝西省沔縣の西南、寧羌縣界、沔水(漢水)の源。

(2)甘肅省成縣の東北、西漢水(嘉陵江)の源。

この蟠冢山を鮒魚の山にあてることも考えられるが、顓頊の家を蟠冢山におくことには無理がある。

Aの鮒魚の山より出る漢水は、漢水の訛であると郝懿行は言う。北堂書鈔92引では漢水を漢水としている。しかも漢水ならば東郡濮陽にあり、顓頊を葬るといふ記事とも合致するという。

B(1)務隅の山の顓頊を葬るといふ記事に、郭璞は、冢は濮陽に在ると注している。

顓頊、號爲高陽、冢今在濮陽、故帝丘也。一曰、頓丘縣城門外廣陽里中。

郭璞が、顓頊の冢が濮陽にあるといふのは、後に記すように、顓頊の墟が帝丘であるからであろう。その一曰は、史記五帝本紀集解引の皇覽に、

顓頊冢、在東郡濮陽頓丘城門外廣陽里中。

とあるのに據つたのであろう。ただ傍線の五文字がなく、かつ「頓丘縣」と「縣」字を添えているのは、單にまぎれこんだだけなのか、それとも別に頓丘縣に顓頊の冢があるとされるからであろうか(後の四頓丘の項参照)。また、濮陽を故帝丘としているが、五帝本紀「帝顓頊高陽者」集解に

皇甫謐曰、都帝丘。今東郡濮陽是也。

と見える。

このように鮒魚、附禺、務隅の三山(一山とも考えられる)はプイという共通の名稱をもち、そこに顓頊が葬られるといい、さらにそれが濮陽の地にあるとするのは何故であるうか。濮陽周邊にその背景となりうるものがあるかどうかを考えてみたい。

(二) 濮陽をめぐる

濮陽周邊のことは水經注において、(1)卷8濟水、(2)卷24瓠子河、(3)卷5河水に見えるが、(1)では漢水、濟水、(2)では瓠子河、(3)では白馬瀆、浮水などについてふれてみたい。

(1) 漢水、濟水

漢水は二水があり、その一は水經注8に見えるが、封丘縣で濟水を承け、地理志にいわゆる「漢渠水、首受濟者也。」にあたり、闕駟の、「首受別濟。」というのは北濟のことであるという(漢書地理志には見當らない)。濟水には南、北の二水があつて、陽武縣の南を流れるのが南濟、陽武縣の北を流れるのが北濟である。濟瀆ともいう。

この封丘縣については、水經注7濟水條に記されている。

濟瀆又東逕封丘縣北。南燕縣之延鄉也。其在春秋、爲長

丘焉。應劭曰、左傳、宋敗狄於長丘、獲長狄緣斯、是也。漢封翟野爲侯國。濮水出焉。

この濮水が北濟より分流する地點の南に在る封丘縣は、春秋の時、長丘とよばれ、長狄が據つていたことは注意すべきである。

左傳文公11年の記事に、宋武公の世、鄭瞞は宋を伐つた時、宋の司徒皇父らは狄を長丘に敗り、長狄緣斯らを獲たとある。このことについては既に考察したことがあるが、夏には防風氏、殷には汪芒(罔)氏、後に鄭とよばれた北方長狄國(説文6下)は、封嶋の山を祀つていたとされる(史記40、孔子家語4、魯語下)。従つてこの「封丘」は「封嶋」の山を想起させるであらう。黄河から分流する濮水はまだ普河とよばれることを思い合せると、封丘縣で濟水から分流する濮水の名は、封嶋の山にかかわるように想像できるであらう。

この濮水即ち濮渠水は東北に流れて、左より別の濮水と合すると、水經注8濟水の條に記している。杜預の、「濮水出酸棗縣、首受河。」というのがそれである。酸棗の邊に河水が溢れ、漢の時にこれを塞ぎ、今は水なく故瀆があるのみという。

この別濮(故瀆)を合せて、濮水は漆城、蒲城、韋城

(白馬縣)を過ぎ、濮陽縣故城の南を過ぎる。文公11年傳杜預注に、「鄭瞞、狄國名也。防風氏之後、漆姓也。」とあり、「漆」は長狄とかかわりをもつ。また蒲城は故衛の蒲邑で(桓公3年傳)、「蒲」という名も注目される。韋城については、「即白馬縣之韋鄉也。史遷記曰、夏伯豕韋之故國矣」と水經注8にある。豕韋氏については後に述べる。

濟水は乘氏縣の西で二水に分れ、北の濟瀆は濮渠を合す。さらに東流して鉅野に入る。「故地理志曰、濮水自濮陽南入鉅野。」(水經注)という(地理志東郡、濮陽に、應劭を引いて「水南入鉅野。」という)。

鉅野澤を出た濟水は須昌を過ぎると馬頰水を合する。そこに魚山がある。

(魚)山即吾山也。漢武帝瓠子歌所謂吾山平者也。山上
有柳舒城。(水經注8濟水)

水經注はさらに、魏の陳思王曹植がこの山に登つて終焉の志をもつたといひ、山の西にその墓があると記す。

漢武帝の元光三年、濮陽で河水が決し(漢書6武帝紀)、二十餘年を経て、元封二年、武帝は瓠子口に至り、白馬玉璧を沈めて河神に祈り、瓠子歌を作つた。その中に、「殫爲河兮地不得寧、功無已時兮吾山平、吾山平兮鉅野溢……」と歌っている(漢書29溝洫志)。韋昭は山を鑿つて河を填

めると解し、如淳は、水が山を漸し、鉅野澤が溢れると解する。

太平寰宇記13鄆州東阿縣に、魚山について、

述征記、濟北郡史攷超 魏嘉平中有神安成公智瓊降之。

超同室疑其有姦、以告監國詰問、超具言之。智瓊乃絕。

後五年、超使至洛西。到、果是。同乘至洛。克復舊好。

ここには、曹植の洛神賦を想起させるふしもあるが、王維に魚山神女祠二首、即ち迎神曲と送神曲があり（王右丞集箋注上1）、河岳英靈集では「漁山神女智瓊祠歌」に作り、楚辭後語は「魚山迎送神曲」、樂府詩集は「祠漁山神女歌」に作るという。箋注に、述征記を引いて、「神安成公」を「神女成公」とし、「洛西」の次に、
到濟北魚山下。陌上遙望曲道頭、有車馬似智瓊。前到果是。

を加え、以下同じで、「太康中仍存」を最後に加えている。

詩は、「迎神曲」で次のように歌う。

坎坎擊鼓、魚山之下。吹洞簫、望極浦。女巫進、紛屢舞。

陳瑤席、湛清醕。風淒淒兮夜雨。神之來兮不來。使我心

兮苦復苦。

あきらに「女巫」が魚山神女を迎える祭祀であり、神は恐らく洛水神のようなものである。楚辭の神を思わせる。

さらに「送神曲」がある。果して王維の作かどうか明らかにしないが、傳統的な歌辭をふまえたものであろう。

この吾山—魚山は、鮒魚の山を想起させるともいえよう。形が魚に似ているから「魚邱」と名づけられることもあろうが、その山上に「柳舒城」ありという記事が目につく。華陰縣の「平舒城」には水神の傳承がある。

さて、次に濟水は、穀城縣の西を過ぎ、周首亭の西を通る。寰宇記（13鄆州東阿縣）にも、「周首亭、郡國志云、周首亭即埋長狄榮如首於此、即此地也。」と言うように、さきに述べた封丘即ち長丘で殺された長狄緣斯の一族である。長狄鄭闞の三兄弟とされる喬如、榮如、焚如は、公羊傳では「一は齊に行き（榮如）、一は魯に行き（喬如）、一は晉に行く（焚如）」とあるが、實際は兄弟ではなく、それぞれ長狄の部族として各地に居つたのであろう。この焚如は「鄆舒」とも書かれ（宣公15傳）、符禺（フイ）の名稱を持つ。

左傳文公11年の記事に、

齊襄公之二年、鄭闞伐齊。齊王子成父獲其弟榮如。埋其首於周首之北門。

と見え、杜預は「周首、齊邑也。濟北穀城縣東北有周首亭。」と注し、水經注（濟水8）には

春秋文公十有一年左丘明云、襄公二年、王子成父獲長狄僑如、弟榮如。埋其首於周首之北門、卽是邑也。今世謂之盧子城、濟北郡治也。

と記す。これは同じく文公11傳に、

冬十月甲午、敗狄于鹹、獲長狄喬如、……

埋其首於子駒之北門。」

とあるのをままとめたのであるが、「鹹」は、杜注に「鹹、魯地也。」とあり、子駒の北門については、「子駒、魯郭門。」(文11經杜注)という。従つて長狄喬如は魯地の鹹で殺され(戈で喉をつかれて殺された)、榮如は周首の門に首を埋められたというのは、封丘で長狄緣斯が獲られたことを思い合せると、この濮水、濟水の間は長狄の根據地であつたことが知られる。即ち左傳の記事によると、衛を中心に、曹、魯、齊に及んで長狄の地であつたのである。この長狄は、防風氏の後として、符禺の山にかかわる部族である。

(2) 瓠子河

水經注24瓠子河の記事によると、まず經に「瓠子河出東郡濮陽縣北河。」とあり、縣の北十里が瓠子口であつて、西漢武帝の時決壊したことは前に記した。河水はもと東に決し、濮陽城の東北を過ぎ、更に東して鹹城の南を經るとい

う。

又東逕鹹城南。春秋僖公十三年夏、會於鹹。杜預曰、東郡濮陽縣東南有鹹城者是也。

前に文公十一年傳に、長狄喬如を討ちとつた鹹は魯の地と杜預は言い、ここには、「鹹、衛地」(僖公13經)というから、別の鹹である。郡國志、東郡に、「春秋時濮有鹹城、或曰古鹹國。」と記す。

瓠河故瀆は、句陽縣の小成陽を過ぎて、都關縣故城の南で濮渠支流と合する。この成陽は堯を葬つた地であるとする説を、水經注24はとりあげている。墨子では蜚山の陰に葬つたとし、山海經(海外南經)では、狄山の陽に葬つたとする。しかし堯の冢とするものは他にも多い。なお海外西經、狄山に「帝堯葬于陽、帝嚳葬于陰。」とするが、皇覽冢莫記では、「帝嚳冢在東郡濮陽頓丘城南臺陰野中。」とする。

瓠子河は濮陽に近く、濮陽は頓項にかかわる地とされる。「瓠」は滑吾切、音獲、虞韻、あるいは胡誤切、音護、遇韻であり、とすれば、符禺(鮒魚)即ちブイの音を想起させ、「濮」にも通ずると言えよう。

(3) 白馬瀆、浮水

河水が酸棗縣の西を過ぎるところで、濮水(別の濮水)

が東に出ることは前に述べた。河水は東して滑臺城の北を過ぎる（隱公元年傳・鄭の廩延邑の地）。水經に「東北過黎陽縣南。」とあり、水經注によると、對岸に鹿鳴津（鹿鳴臺）があり、河の渡りを鹿鳴津、または白馬濟という。津の東南に白馬城がある。

白馬有韋郷。韋城故津、亦有韋津之稱。

前に濟水の項で述べたように、濮渠は白馬縣韋郷の南を流れる。白馬縣には南に濮渠、東に白馬瀆が流れている。

河水舊於白馬縣南、洑通濮濟黃溝。

とあるように溢れた水を防ぐため、金隄が築かれ、故渠は水が斷たれ、これを白馬瀆というのである。

故瀆は東して鹿鳴城の南、ついで東北して白馬縣の涼城の北を通る。ここに白馬山があるという。

蒼舊傳云、東郡白馬縣之神馬亭、實中層峙。南北二百步、東西五十許步、狀丘斬城也。（この句は脱誤があるかも知れない。）……西去白馬津可二十許里。東南距白馬縣

故城可五十里。疑即開山圖之所謂白馬山也。山下常有白馬驛行。悲鳴則河決。馳走則山崩。

白馬群行し、悲鳴すれば河が決するという傳承は、白馬を沈めて河神を祀る儀式（漢武帝が瓠子口で白馬を沈めて河伯に祈つた。）と關係があるのであろう。治水に失敗した

とされる鯨の名が白馬であり、顓頊の子とされることも思ひ合わされる。「白馬」の名稱は、ブイにかかわるものと考えられる。

この白馬瀆は、東南して濮陽縣をすぎ濮水に散入すると記されているが、ここで河の對岸にうつつて、

河北有般祠。孟氏記云、祠在河中。積石爲基。河水漲盛、恒與水齊。戴氏西征記曰、今見祠在東岸。臨河累石爲壁。其屋宇容身而已。殊似無靈。不如孟氏所記、將恐言之過也。

この般祠も渡りの神を祀つたのであろうが、「般」は「白馬」につながるかと考えてよからう。今白馬人の自稱は「貝」即ちブイであるという。

河水はさらに東北して伍子胥廟の南を過ぎる。この北岸の地は頓丘郡界である。長壽津に至ると、河の故瀆が別れる。王莽河ともよばれるが、この故瀆は東北して、戚城の西を通る。左傳哀公二年、晉の趙鞅が師を率いて衛の太子蒯聵を戚に納れようとしたところで、杜預は「是時河北流、過元城界、戚在河外。」という。また、「今頓丘、衛國縣西戚亭是也。」と水經注はいう。故瀆はさらに繁陽縣故城の東を通る。

水經（5河水）にいうように、「東北して濮陽縣の北を

過ぎ、瓠子河が出る」のである。水經注によれば、濮陽縣の北は濮陽津とよばれ、瓠子口がある、河水は衛國縣の南を過ぎ、范縣の秦亭の西を過ぎて、浮水を合する。

左會浮水故瀆。故瀆上承大河於頓丘縣、而北出。東逕繁陽縣故城南。應劭曰、縣在繁水之陽。張晏曰、縣有繁淵。春秋襄公二十年、經書、公與晉侯齊侯盟於澶淵。杜預曰、在頓丘縣南、今名繁淵。澶淵、卽繁淵也。亦謂之浮水焉。この浮水故瀆と、前にあげた大河故瀆（王莽河）との位置關係がわかりにくい、楊守敬の水經注圖（南四西一）では、頓丘の西側にほぼ二水を平行して北上させ、繁陽の南で合流するように位置せしめている。それはとにかくとして、ここで問題にしたいのはその名稱である。

右の水經注の記事から、浮水は繁水であり、繁陽の名はこれによるのであろう。さらに繁淵は澶淵である。澶は時延切、音蟬、先韻である。襄公20經の杜注は、「澶淵在頓丘縣南。今名繁汙。此衛地、又近戚田。」と記し、「繁汙」が「繁淵」である。この「浮水」といい、「繁汙」という名は「フイ」を思わせるであらう。大荒北經の附隅の山の衛于丘の西に顓頊の浴した沈淵、封淵に似た名である。

以上、濮陽をめぐる、濮水、濟水、河水、白馬瀆、瓠子河、浮水など、鮒魚山にかかわるものをその晉フイを介し

て注意してきた。ここでいよいよ濮陽を顓頊の墟とする傳承について考察してみたい。

(三) 濮陽と顓頊、昆吾、衛

水經注24瓠子河に

①（水經注）河水舊東決、逕濮陽城東北。故衛也。帝顓頊之墟。昔顓頊自窮桑徙此、號曰商丘。或謂之帝丘。本陶唐氏火正閼伯之所居、亦③夏伯昆吾之都、殷相土又都之。故春秋傳曰、閼伯居商丘、相土因之、是也。衛成公自楚丘遷此。

と諸傳承をあつめてゐる。

さらに濮陽に關する地理志、東郡濮陽の記事Bと、郡國志、東郡濮陽の記事Cとを列舉してみよう。

④（地理志）濮陽。衛成公自楚丘徙此、故帝丘、顓頊墟。

⑤（郡國志）濮陽、古昆吾國。⑥、杜預曰、古衛也。帝王

世紀曰、顓頊自窮桑徙商丘。左傳曰、衛、顓頊之墟。杜

預曰、帝丘。昆吾氏因之、故曰、昆吾之墟。城內有顓頊

冢。皇覽曰、冢在城門外廣陽里中。

この三つの記事の内容を整理すると、

①顓頊の墟である。A・B・C

②Aは「昔顓頊自窮桑徙此、號曰商丘。」といい、③は「顓頊自窮徙商丘。」といい、共に同じである。呂氏春秋（古

樂)には、「帝顓頊生自若水、實處空桑、乃登爲帝。」と見え、空桑は窮桑でありこの場合若水から推して西方に在ると考えられる。拾遺記1によれば、少昊の母皇娥は「經歷窮桑滄茫之浦、白帝の子と逢い、少昊を生むのであるが、「窮桑者、西海之濱。」とされ、千尋の孤桑の樹があると記されている。さらに尸子(太平御覽3引)によれば、「少昊金天氏邑於窮桑。日五色、互照窮桑。」といい、この窮桑は東方に在ると推せられる。大荒東經に「東海之外大壑、小昊之國。少昊孺帝顓頊於此。」といい、少昊の國は東方海外にあり、少昊は甥の顓頊を育てている。初學記9引帝王世紀では、「顓頊生十年、而佐少昊、二十而登帝位。」という。ただ大戴禮、帝繫では、「黃帝產青陽(少皞)及昌意、皆不立、而昌意產高陽。是爲帝顓頊。」という。昌意は若水に降つて蜀山氏を娶り顓頊を産んだというわけである。^⑧

以上のように「窮桑」の位置はもとよりさだかにしがないが、「商丘」にうつるといふのは問題がある。Aに「或謂之帝丘。」とあるように、左傳(昭公17)に、「衛、顓頊之虛也、故爲帝丘。」に従うべきである。

②陶唐氏火正、閼伯の居る所である。①A
閼伯の居は商丘であり、商丘は宋の地であるから、衛の

地にある帝丘と混同しているわけである。杜預春秋釋例5によると、

(7)宋地、商丘。傳曰、陶唐氏之火正閼伯居商丘、祀大火。

(4)衛地、帝丘。古帝顓頊之墟、故曰帝邱。昆吾氏因之、故

曰昆吾之墟。東郡濮陽是也。

右の(7)の傳とは左傳(襄公9)の記事で

陶唐氏之火正、閼伯居商丘、祀大火而火紀時焉。相土因之、故商主大火。

といい、杜注に、「陶唐、堯有天下號。閼伯、高辛氏之子。傳曰、遷閼伯於商丘、主辰。辰大火也。今爲宋星。然則商丘在宋地。」ということによつて明らかであるが、右の傳は昭公元年のものである。昔、高辛氏(帝嚳)に閼伯と實沈という二子があり、仲悪く、常に干戈を以て征討しあうので、后帝(堯)は閼伯を商丘に遷して辰を主らせ、商人はこれによつた。實沈は大夏(晉陽縣)に遷され、唐人がこれに因り、夏商に服事したという。

左傳(襄公九年)にも、「陶唐氏之火正閼伯は商丘に居り、大火を祀り、火もて時を紀す。相土これに因る。」と記し、杜注に相土は契の孫、閼伯の後に代り、商丘に居つたという。殷本紀では、帝嚳の次妃簡狄が玄鳥の卵を呑んで孕み、生んだのが契であり、契の孫が相土であるとい

う。相土については、商頌長發の篇に、「相土烈々、海外有截。」とあり、海外までその秩序に組み入れたというのである。

この商丘はもと湯王の都、亳邑であり。周の時は宋の都となる（方輿紀要50歸德府商邱縣）。今河南府、歸德府商邱縣であり、城の西南三里に商丘があり、周三百歩、世に闕臺と稱するという。

衛地の帝丘は濮陽に在り、◎の左傳云々は、「衛、帝顓頊之墟也、故爲帝丘。」（昭公17傳）であり、杜注に「衛、今濮陽縣也。昔帝顓頊居之。其城内有顓頊之冢。」によつたものである。衛地と顓頊の傳承は深く結びつく。

③夏伯昆吾の都である。A・C
國語（鄭語）に、

佐制物於前代者、昆吾爲夏伯矣。大彭、豕韋爲商伯矣。と記す。夏の中葉以後、昆吾は大彭、豕韋と並んで東方の強國であつた。韋昭注に、「昆吾、祝融之孫、陸終第一子、名樊、爲己姓。封於昆吾。昆吾、衛是。其後夏衰、昆吾爲夏伯、遷於舊許。」という。

顓頊―老童―吳回―陸終―昆吾の系譜（大戴禮記、帝繫）をたどれば、昆吾は顓頊の後ということになる。左傳（昭公12）に、楚靈王は、「昔我皇祖伯父昆吾、舊許是宅。」と

見え、杜注によると、陸終氏の六子のうち、長は昆吾、少は季連であり、季連は楚の祖であるので昆吾を伯父といつた。この舊許は今、許昌縣であるという。許はもともと大岳の後が居つたとされ、己姓の昆吾とのかかわりが考えられるであらう。

殷本紀によれば、

夏桀爲虐政、淫荒而諸侯昆吾氏爲亂。把鉞以伐昆吾、遂伐桀。

とあり、湯王は昆吾、桀王を伐つたのであるが、夏の閼伯の後、商丘によつた相土は湯王の裔である。帝王世紀（郡國志河東郡安邑引）に「湯伐桀、戰昆吾亭。」とある。左傳（哀公17）に、衛侯が夢に北宮にて人が昆吾の觀に登るのを見たこと記し、杜注にもいうように、濮陽城中、昆吾の墟に觀があつて昆吾の名を冠していたことが知られる。商頌長發篇に、「韋顧既伐、昆吾夏桀。」とあり、湯王が韋國、顧國、昆吾國を伐ち、さらに夏桀を誅したことを歌う。昆吾（音混）―混―渾（音胡昆反）、渾敦は混沌に作る。昆吾は符禺に通ずる。顧國は山東范縣にある（哀公21傳）。

③白馬濱項でふれた濮陽の南の白馬縣韋郷は、夏伯豕韋の故國と傳えられる。豕韋氏は昆吾氏が帝丘に遷つたころ、同じく祝融八姓の己姓諸國（蘇、顧、溫、董）と共に

建國したのである。[韋]は「郟」、「衛」に作られる。

莊子大宗師に、豨^A韋氏とあるのも同じで、道は鬼神、天地の根源であると述べ、まず豨^A韋氏、次に伏羲氏以下をあげている。「豨^A韋氏、得之以挈天地」といい、天地の營みを調整するものとする。豨^A韋氏については徐旭生の説に詳しい。

④ 衛の成公は楚丘よりここに遷る。A・B

春秋(僖公31經)に、「冬狄圍衛、衛遷于帝丘。」と見え、衛は狄の侵犯を避け楚丘に遷つたが、さらに狄を避けて帝丘に遷つたのである。僖公31傳に、「衛成公夢、康叔曰、相奪予享。公命祀相。」寧武子不可、曰、鬼神非其族類、不歆其祀。杞郟何事。相之不享於此久矣。非衛之罪也。」と見え、この相とは、夏后啓の孫で帝丘に居たが、杞郟など夏の後が饗祀しないから相の靈が、衛の祖康叔のもとに現れたというのである。哀公元年傳に、有過の澆は斟灌、斟鄩(夏の同姓諸侯)を伐つた後、「夏后相を滅した。」と傳える。帝丘は夏伯昆吾の墟であり、後に衛の成公が狄の避けるを避けてこの地に遷つたのである。

(四) 頓丘と顛頊、帝嚳の家

上述のように衛地の濮陽は顛頊の墟であり、帝丘とよばれたが、◎の杜注には「其城内有顛頊之家」といい、同

じく◎の皇覽には「家在城門外廣陽里中。」といい、若干のくいちがいがある。ところが山海經(海外北經) B 務禺之山の郭璞注には

顛頊、號爲高陽。家今在濮陽、故帝丘也。

一曰、頓丘縣城門外廣陽里中。

とあり、右の傍線 a と c には矛盾がない。b は「城門外」という點で異なるが、d は「頓丘縣城門外」といい、濮陽縣とは別地になる。

◎(郡國記)に引く皇覽の文 b は、史記五帝本紀集解にひく皇覽とは異なる。即ち

顛頊家、在東郡濮陽頓丘城門外廣陽里中。頓丘者、城門名頓丘道。

と記す。「頓丘」は城門の名であるというから、b には矛盾しない。ただ郭注 d に「郟丘縣」とあるのは、もし皇覽によるのであれば誤りである。

水經注 9 淇水の記事には、

(淇水)東北逕同山東。又東北逕帝嚳家西。世謂之頓丘臺、非也。皇覽曰、帝嚳家在東郡濮陽頓丘城南臺陰野中者也。又北逕白祀山東。歷廣陽里、逕顛頊家西。俗謂之殷王陵、非也。帝王世紀曰、顛頊葬東郡頓丘城南廣陽里。大家者是也。

淇水又北屈而西轉、逕頓丘北、故闕駟云、頓丘在淇水南。とある。帝嚳の家、顓頊の家が並び存する。五帝本紀によれば、顓頊（高陽）と帝嚳（高辛）は並び擧げられ、高辛は顓頊の族子とされる。先に記したのは逆に、顓頊は帝嚳の甥とされ、諸説がある。高辛の子闕伯が商丘に居たが、この商丘を帝丘と混同する説もあるように、ここでも帝嚳と顓頊の家が並んでいる。

山海經（海外南經）に「狄山、帝堯葬于陽、帝嚳葬于陰。」とあり、郭璞注に「嚳、堯父、號高辛。今家在頓丘縣城南臺陰野中。」という（これは前に②瓠子河でふれた。即ち小成陽の地と水經注はする）。皇覽冢墓記では、「帝嚳家在東郡濮陽頓丘城南臺陰野中。」とあり、右の水經注の記事と同じである。

淇水が雍榆、同山にかかる前は白溝とよばれるが、その邊に臺陰野がある。

一水逕土軍東、分爲蓼溝。東入白祀陂。又南分東入同山陂。漑田七十餘頃。二陂所結、即臺陰野矣。

この臺陰野は恐らく低濕の地と推測され、しかも後に同山を過ぎてから帝嚳家を通ると言うのだからかなり距離がある。

この帝嚳家について、「世謂之頓丘臺、非也。」

というのは何故であろうか。

確かに「頓丘」が顓頊家の次に出てくるから、帝嚳家を「頓丘臺」とよぶのは誤りというのであろうか。この頓丘の次には「頓丘縣故城」が出てくる。そこで水經注は頓丘について説明する。

爾雅曰、山一成、謂之頓丘。釋名謂、一頓而成丘、無高下小大之殺也。

これによれば盛り土したような丘陵をさすようで、頓丘は普通名詞と考えられる。頓丘縣故城については、

皇覽曰、頓丘者、城門名、頓丘道。世謂之殷、皆非也。蓋因丘而爲名、故曰頓丘矣。

といい、城門の名ではなく、丘の名によるものと言っている。

そこで頓丘は、並通名詞とも固有名詞ともいえる。しかし「廣陽里」といえば、この淇水注に「又北逕白祀山東、歷廣陽里、逕顓頊冢西。」とあるから、頓丘縣に屬する（しかし皇覽などの記事から、ここにおいたことも考えられる）。「濮陽頓丘城門外廣陽里中」という五帝本紀集解引皇覽が頓丘を城門の名と説明するのは、苦しいようである。しかし水經注24瓠子河では、帝顓頊の墟を濮陽縣におき、9淇水では、顓頊の家を頓丘縣においたのは、矛盾と

いうほかはない。

漢書地理志、東郡では、濮陽と頓丘を並列している。讀史方輿紀要10開州に、「古昆吾國、春秋戰國爲衛地。秦爲東郡地、漢仍屬東郡。後漢因之。晉爲頓邱及濮陽國地。」とあり、濮陽縣は今の州治で、清豐縣の西南二十五里に頓邱城があると記す（故城は縣西北十五里）。要するに、濮陽縣と頓丘縣は河を隔てて相接し、ともに東郡に屬し、古衛地である。

太平寰宇記57澶州頓邱縣の項に、縣の西北三十里に顓頊陵があり、同じく縣の西北三十里に帝嚳陵があるとするのは、水經注によつたものであろうか。また縣の西北三十里に鮒鰮山があり、今は廣陽山と名づくというのは、次に引くように山海經によつたものである。

山海經云、顓頊葬其陽、九嬪葬其陰、四蛇衛之。鮒鰮山者、今廣陽之別名也。

これと同文が太平御覽45にも見え、その末句は「蓋今廣陽山之別名也。」となつてゐる。今本山海經には見えないし、恐らく「鮒鰮山者云々」は郭璞の注が本文に紛れこんだものであろう（今この郭璞注はない）。この「廣陽山」は、水經注の「廣陽野」であり、恐らく顓頊の高陽に本づくものであろう。寰宇記はさらに「按郡國志云、顓頊所葬、俗

名青冢山。」とあるが、今郡國志には見當らない。

水經注9淇水の「又北逕白祀山東、歷廣陽里、逕顓頊冢西、俗謂之殷王陵、非也。」について、顓頊剛氏は、顓頊冢を殷王陵とする説は、この地が今安陽の東南百里に在り、確かにその可能性があり、この一家は葬られた殷王の名が失われ、後人が東の濮陽からも遠くないので、顓頊の墟によつて顓頊の冢と推定したのだと言つてゐる。ここに見える「白祀山」は、「鮒鰮山」の名に似ている。臺陰野に白祀陵の名も見える。顓頊と鮒鰮即ち符禺の山とのかわりを思わせる。

以上要約すると、鮒鰮の山に顓頊を葬るといふ山海經の記事から、その背景となるものを探つてきたのであるが、顓頊によつて示される部族が、符禺即ちブイの山を祖靈の宿る山として仰ぐのではないか、というのが發想の根據である。

まず顓頊の墟は帝丘として濮陽にあるとされるが、濮陽をめぐつてブイ即ち符禺の音を思わせる地名（封丘など）、水名（濮水、瓠子河、浮水、白馬瀆など）、山名（白馬山、白祀山、吾山など）、あるいは殷冢など多く見出される。顓頊の冢は頓丘縣にあるとする説もあり、直ちに否定し去ることも出来ない。附禺の山に記された沈淵、封淵が、頓

丘縣では繁洲、澶洲の名で見える。

特に注意すべきは長狄の故地、即ち封丘（長丘）や周首亭の所在、そして春秋や左傳に記録されたように、長狄が、この濮陽のある衛の地をめぐつて、魯、齊、曹などにひろがつて存在することである。長狄の祖とされる防風氏は封嶠の山を祀ると伝えられる。

従つて、この地にプイにかかわる名稱が多く存在することと首肯できるし、顛頊の家が濮陽と頓丘の二地に伝えられることも、兩地が河水を挟んで接していることから理解できないわけではない。

徐旭生氏は鮒魚、務隅、附禺の三山は一つであり、漢水は漢水の誤り、「河水の間」というところから黄河から遠くないと論じているが、さらに背後にある長狄の存在に注目しなければならぬであろう。

注、本稿は符禺の山に關する一連の考察の一部である。

①太平御覽45引、太平寰宇記57頓邱引では「鮒嶠」に作る。

②顧頊剛：史林雜識初編、顛頊P195 顛頊が衛丘に葬られたということは、衛が帝丘に遷つたことの別證だという。即ち顛頊の墟帝丘は、衛成公が遷つたところ即ち衛丘であるからである。

③牙含章氏：關於「吐蕃」「朵甘」「烏斯藏」和「西藏」的語源考證（民族研究第四期）○孫宏開：歷史上民族和川甘地區的白馬人（民族研究第3期）なお拙稿、符禺の山と彭衛・馮夷など

（中國文化39號）參照。

④前記拙稿參照。

⑤幡冢山については別稿（未發表）

⑥郡國志陳留郡封丘、「博物記有狄溝、即敗狄于丘是也。」○地理志、陳留郡「孟康曰、春傳敗狄于長丘、今翟溝是。」

⑦拙稿「防風氏と封嶠の山」（日本中國學會報33）

⑧讀史方輿紀要34高唐州、魚邱山。

⑨水經注19渭水。拙稿③參照。

⑩文公11傳、杜注「緣斯、僑如之先也。」

⑪海內經に「黃帝生駘明、駘明生白馬、白馬是爲鯀。」とある。世本では黃帝—昌意—顛頊—鯀とする。鯀は治水に失敗し、禹がついだと治水傳説に結びつけられている。

⑫白馬氏の後とされる白馬人は、白馬山を祖靈の山としていつく。③の孫宏開氏の論文參照。

⑬五帝本紀、顛頊（五帝德にも）に「東至于幡木」の幡木は扶桑とされる。顧頊剛氏は顛頊の名は星宿より生じたという。②

⑭昭公17傳、郊子は少暉氏を吾祖という。「我高祖少暉擘」

⑮五帝本紀では帝嚳は顛頊の族子とする。海內經では昌意の子乾荒（韓流）が淖子を娶つて顛頊を生んだとする。

⑯晉語に「大火、閼伯之星也。是謂大辰。」とし、昭公18傳に「宋、大辰之虛也。」とする。

⑰今本竹書紀年、帝癸、桀に「二十年昆吾氏伐商。」「三十年商師征昆。三十一年克昆吾。」とある。

⑱王國維：鬼方昆夷獯豸考（觀堂集林13）

⑲ 徐旭生氏：中國古代的傳說的時代第二章七 P 118 二集團的交互關係。

⑳ 僖公 2 傳、楚丘は滑縣。閔公 2 傳によると狄は衛を滅ぼす。衛人は戴公を立てて曹に處す。かくして築いたのが楚丘である。

㉑ 昭公 17 傳杜注「衛、今濮陽是也。昔帝顓頊居之。其城內有顓頊之冢。」

㉒ 顓頊は、虞、夏、秦、楚の先とされ、その傳承は多岐にわたる。② 参照。

㉓ 讀史方輿紀要 16 清豐縣、鮑鰐山に、「又有秋山亦在頓邱西北。山海經、帝嚳葬其陰。今故址已溷。」とある。秋山は狄山の訛。

㉔ 水經注はこの後の記事に顓頊冢について、「俗謂之殷王陵非也。」というのに準ずれば、「世謂之殷王臺、非也。」の訛ではないか。

㉕ 地理志東郡頓丘に「師古曰、以丘名縣也。丘一成爲頓丘。謂一頓而成也。或曰、成、重也、一重之丘也。」という。

㉖ 顧頡剛氏 ② を参照。

㉗ 徐旭生氏 ⑱ 参照。